

生命保険文化センター賞

「もしも」の話

大阪府 吹田市立第一中学校 二学年

山村 千遥

「もしも今度の中間テストで百点取ったら千遥の欲しい物買ってあげるわ。」

と母が言う。私が百点なんてあり得ないので、母は余裕の顔である。

「もしも優勝したら」「もしも宝くじが当たったら」……。こんな話は楽しくて、夢も広がり盛り上がる。

生命保険も「もしも」の話だ。けれど、こちらはなかなか話しづらい。「もしも病気になったら」「もしも死んだら」……。よくない話ばかりだ。両親にあてはめてその瞬間を想像しただけでも涙が出る。そして、不安でいっぱいになる。

この不安は何だろう。今まで両親と妹と私で、たまにけんかをしながらも、充実した幸せな毎日を送ってきた。それが突然途切れる。親に何かあること自体がとても怖いし、同時に、今の生活が続けられなくなるのでは……。という恐れも感じる。我が家の場合は父だけが働いているので、その父に何かあれば、生活をしていくための収入がなくなることになる。でも、中学生の私にはどうすることもできない。それが、不安につながっているように思う。

そこでその不安を安心に変えるために、生命保険があるのだと分かる。

お金のことを話すのは、卑しい、浅ましいと言われることとされ、一般的には、あまり話さない気がする。生命保険は人の命や健康に関わる「もしも」の時のお金なので「そんな不謹慎な……」ということとで余計に口にしにくい。私も親の「もしも」の話などしたくはないけれど、この不安がどうにもできなくて、あえて母に聞いてみた。

我が家は、父の「もしも」に重点をおいて考えた上で、二人とも生命保険に入っていること、結婚した時に初めて加入し、その後は私を妊娠した時、妹を妊娠した時に、保険の見直しをしていることを知った。結婚して二人で支え合って生きていく中で、相手の生活に対しても責任がある。入院すれば医療費も必要。子供が生まれると、こんな風に育って欲しいなく、大学に行って勉強して欲しいなくとあれこれ想像する。子供が増える必要になるお金も増える。では、

第51回中学生作文コンクール

いくらくらい必要になるのか……等、そのつど両親は保険会社の方とも相談しながら我が家の保険を作りあげていったそうさ。

でも母は、

「みんなの将来を想像するのは楽しいけれど、お互いの身に不幸が起きた時のお金の話をするのはやっぱりしんどいもんよ……。自分が欲深い人間に思われたらどうしようって思ったりするし……。お父さんが病気になった姿を想像しただけで泣きそうになるから精神的にきつかった。」

と言う。

今は、加入している保険で満足しているらしく

「年に一回送られてくる書類を見て、『よしよし！』と思うくらいよさ。」

と笑っていた。

私は、両親が私達の将来を真剣に話し合い、不安を感じることもなく生活できるように、一生懸命考えてくれていたことがうれしかった。私の知らない所でこんな形でも大切にされてきたことを知り、親の愛情の大きさを実感した。また、保険に入るには、将来を見せる想像力が必要だと思った。言いづらいお金の話をするためにはお互いの信頼関係も必要だ。そう思うと普段あたり前のように接している両親が何かすごい存在に思えてきた。

「もしも」私の願いがかなうなら、いつまでも両親には健康で長生きしてもらいたい。そして、いつかは百点を取って、母の焦る顔が見たい。